

東南アジア史学会会報

1992年5月

第56号

目 次

新会長挨拶	(1)
第14期会長選出経過報告	(2)
1991年度秋季会員総会摘録	(2)
第13期第4回委員会摘録	(4)
1991年度会計中間報告	(4)

創立25周年記念研究大会報告

プログラム	(5)
-------	-----

創立25周年記念公開講演会

商人国家としてのアユタヤ	石井 米雄 (7)
東南アジア史の中の日本	後藤 乾一 (7)

個人研究発表要旨

アジアにおける植民地主義とキリスト教宣教	蔵田 雅彦 (7)
北スマトラにおける港市国家と後背地	弘末 雅士 (8)
15・16世紀のチャンバーとヴェトナムとの関係	和田 正彦 (9)
英国小説の中のインド・東南アジア	小泉 允雄 (9)

シンポジウム「東南アジア研究の新しい展開」報告要旨

サーフィンとドンソン	横倉 雅幸 (10)
「伝統国家論」	関本 照夫 (11)
Loosely Structured Social System	北原 淳 (12)
東南アジア史研究の方法	大木 昌 (12)
Culturalismについて	土屋 健治 (13)

特別講演

Religion and Anticolonial Movement in Southeast Asian History	
	Reynaldo C. Ileto (14)

資料・研究短報

タイの寺院文書の所在と種類	吉川 利治 (15)
ラオスを訪れて	石井 米雄 (18)

地区例会・研究会活動状況	(20)
新入会員・住所変更等	(21)

東南アジア史学会会報

1992年5月

第56号

目 次

新会長挨拶	(1)
第14期会長選出経過報告	(2)
1991年度秋季会員総会摘録	(2)
第13期第4回委員会摘録	(4)
1991年度会計中間報告	(4)

創立25周年記念研究大会報告

プログラム	(5)
-------	-----

創立25周年記念公開講演会

商人国家としてのアユタヤ	石井 米雄 (7)
東南アジア史の中の日本	後藤 乾一 (7)

個人研究発表要旨

アジアにおける植民地主義とキリスト教宣教	蔵田 雅彦 (7)
北スマトラにおける港市国家と後背地	弘末 雅士 (8)
15・16世紀のチャンバーとヴェトナムとの関係	和田 正彦 (9)
英国小説の中のインド・東南アジア	小泉 允雄 (9)

シンポジウム「東南アジア研究の新しい展開」報告要旨

サーフィンとドンソン	横倉 雅幸 (10)
「伝統国家論」	関本 照夫 (11)
Loosely Structured Social System	北原 淳 (12)
東南アジア史研究の方法	大木 昌 (12)
Culturalismについて	土屋 健治 (13)

特別講演

Religion and Anticolonial Movement in Southeast Asian History	
	Reynaldo C. Ileto (14)

資料・研究短報

タイの寺院文書の所在と種類	吉川 利治 (15)
ラオスを訪れて	石井 米雄 (18)

地区例会・研究会活動状況	(20)
新入会員・住所変更等	(21)

新会長挨拶

御挨拶 石澤良昭

昨年秋季大会においてはからずも会員皆様の推挙を賜り明石陽至会長のあとをうけて会長の任につくこととなりました。責任の重大さを痛感し、微力ながら学会の発展に全力を尽くす所存であります。会員の皆様にはこれまで以上の御指導・御支援を賜りますよう、この場を借りてお願い申し上げます。

さて本学会は昨年、25周年という節目の年を迎えました。この間、歴代の会長をはじめ会員各位の努力によって、本学会は大きく成長して参りました。学会の会員数は370名を越え、機関誌は創刊以来21号が発行されました。この会報も現在56号を数えるに至っております。また、春・秋の研究大会とともに、各地区において活発な研究活動が行われております。

このように本学会は着実に東南アジア関係の専門家集団としての役割を果たしつつあります。特に各地区の「月例会」は、若い学生諸君に知的刺激を与え、会員になってもらっております。

しかし、なによりも魅力ある学会としてどのように組織化していくのか、学術・研究上の社会的信用と同時にある種の社会貢献を考えていかねばなりません。会員諸兄姉にご相談申し上げながら、財政、組織、プロジェクトなどにおいて新しい組み立てを考えていきたいと存じます。そして手堅い研究活動を継続いたしながら、東南アジア史研究の発展により一層の努力を行うつもりであります。

なお、新役員は次の方々に委嘱いたしました。併せてご報告申し上げます。

第14期委員（敬称略、任期は1993年12月31日迄）

（庶務）寺田勇文、遠藤正之（会計）奥平龍二、今村宣勝（編集）池端雪浦、桃木至朗、根本 敬（編集顧問）山本達郎（大会）弘末雅士、前田成文、古田元夫、加納啓良（渉外・学術情報）土屋健治（渉外・学術情報顧問）石井米雄（東北・北海道地区）坪井善明（関東地区）桜井由躬雄、嶋尾 稔（中部地区）伊東利勝（関西地区）深見純生、黒田景子（中国・四国地区）植村泰夫（九州地区）新田栄治

以上その他に、委員会の構成メンバーには含まれませんが、会計監査を吉川利治氏に、編集補助を岡田建志、岩城高広の各氏にお願いすることになりました。

また事務局は下記に置きます。

〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学アジア文化研究所気付

Tel 03-3238-3697 Fax 03-3238-3690

第14期会長選出経過報告

第13期選挙管理委員長 重松伸司

東南アジア史学会第14期会長選出経過につき選挙管理委員会より次のとおり御報告申し上げる。

本会長選出のために設置された選挙管理委員会（重松伸司、伊東利勝、菅谷成子、榎木瑞生及び馬場雄司の5名で構成）は、第13期会長明石陽至氏の任期満了に伴う新しい会長選出のための会長候補者選考委員7名の直接選挙を実施した。昨年10月11日付で選挙人名簿（被選挙有資格者）と277名分（277通）の投票用紙（4名連記）を発送し、同10月26日回答を締め切った。

選挙管理委員会は10月29日、上記投票用紙回答分の開票を行った。回答総数114通、投票総数456票（白票12）で有効な投票総数は444票であった。但し、回答締め切り日を大幅に過ぎて到着した3通は無効とした。右開票の結果、生田滋、池端雪浦、石井米雄、石澤良昭、桜井由躬雄、土屋健治及び山本達郎（以上50音順）の7名の各氏が会長候補者選考委員に選出された。そのうち、石井、石澤、山本の3氏から海外出張等一身上の都合により選考委員を辞退したい旨の届け出があり、選挙管理委員会で慎重審議の結果これを受理し、「東南アジア史学会役員選出規則」第3条2項に則り、次点者を順次繰り上げ、後藤乾一、鈴木恒之、吉川利治の3氏が当選となった。

上記7名によって構成された会長候補者選考委員会は昨年11月29日に選考委員会を開催し、協議の結果、上智大学教授石澤良昭氏を第14期東南アジア史学会会長候補に推挙した。

この結果は、生田滋選考委員長より12月1日に行われた会員総会に報告され、石澤氏が満場一致で第14期東南アジア史学会会長に選出された。

1991年度秋季会員総会摘録

1991年秋季会員総会が、12月1日榎木瑞生会員を議長として南山大学で開催され、次の議事をはかった。

《報告事項》

1. 伊東庶務委員より現在会員数は367名で、今期委員会が発足した時点からみるとこの2年間で60名の増加があったこと、研究助成基金に対する寄付の受付が開始されたことに加え、今回の創立25周年記念大会に関して以下の報告がなされた。

1991年11月29日午後6時より名古屋国際センターホールで公開記念講演会が開催され、180名程度の参加があった。当初、講演は石澤良昭会員と後藤乾一会員にお願いする予定であったが、石澤会員がユネスコの要請により講演会当日カンボジアへ出張せざるを得ない状況になり、石井米雄会員に「商人国家としてのアユタヤ」という題で急遽お引き受け頂いた。

第14期会長選出経過報告

第13期選挙管理委員長 重松伸司

東南アジア史学会第14期会長選出経過につき選挙管理委員会より次のとおり御報告申し上げる。

本会長選出のために設置された選挙管理委員会（重松伸司、伊東利勝、菅谷成子、榎木瑞生及び馬場雄司の5名で構成）は、第13期会長明石陽至氏の任期満了に伴う新しい会長選出のための会長候補者選考委員7名の直接選挙を実施した。昨年10月11日付で選挙人名簿（被選挙有資格者）と277名分（277通）の投票用紙（4名連記）を発送し、同10月26日回答を締め切った。

選挙管理委員会は10月29日、上記投票用紙回答分の開票を行った。回答総数114通、投票総数456票（白票12）で有効な投票総数は444票であった。但し、回答締め切り日を大幅に過ぎて到着した3通は無効とした。右開票の結果、生田滋、池端雪浦、石井米雄、石澤良昭、桜井由躬雄、土屋健治及び山本達郎（以上50音順）の7名の各氏が会長候補者選考委員に選出された。そのうち、石井、石澤、山本の3氏から海外出張等一身上の都合により選考委員を辞退したい旨の届け出があり、選挙管理委員会で慎重審議の結果これを受理し、「東南アジア史学会役員選出規則」第3条2項に則り、次点者を順次繰り上げ、後藤乾一、鈴木恒之、吉川利治の3氏が当選となった。

上記7名によって構成された会長候補者選考委員会は昨年11月29日に選考委員会を開催し、協議の結果、上智大学教授石澤良昭氏を第14期東南アジア史学会会長候補に推挙した。

この結果は、生田滋選考委員長より12月1日に行われた会員総会に報告され、石澤氏が満場一致で第14期東南アジア史学会会長に選出された。

1991年度秋季会員総会摘録

1991年秋季会員総会が、12月1日榎木瑞生会員を議長として南山大学で開催され、次の議事をはかった。

《報告事項》

1. 伊東庶務委員より現在会員数は367名で、今期委員会が発足した時点からみるとこの2年間で60名の増加があったこと、研究助成基金に対する寄付の受付が開始されたことに加え、今回の創立25周年記念大会に関して以下の報告がなされた。

1991年11月29日午後6時より名古屋国際センターホールで公開記念講演会が開催され、180名程度の参加があった。当初、講演は石澤良昭会員と後藤乾一会員にお願いする予定であったが、石澤会員がユネスコの要請により講演会当日カンボジアへ出張せざるを得ない状況になり、石井米雄会員に「商人国家としてのアユタヤ」という題で急遽お引き受け頂いた。

また、11月30日午後6時半よりプリンセスガーデン・ホテルで開催されたレセプションには、会員127名一般市民25名の参加があり、アトラクションとしてミャンマー、マレーシア、インドネシア、フィリピンの踊りが名古屋在住の各国留学生等によって披露された。

このために作成されたポスターは全国の主要大学、愛知県下の図書館、博物館、郷土資料館、高等学校等に配布され、東南アジア史学会が創立25周年を迎えたことを広く周知せしめた。

さらに、これらの事業のため愛知県・名古屋市・協和工業株式会社（名古屋市）など各界より、多大の補助金が寄せられた。

2. 深見会計委員より、1991年度会計の中間報告があった（詳細は4頁参照）。また研究助成基金は、学会よりの繰り込み金100万10円を含め、合計281万10円が形成されていることも併せて報告された。

3. 石井涉外・学術情報委員より、1992年の11月にサンフランシスコで華人・華僑に関する国際学会が開催される予定であり、この件に関しては菅谷成子会員に問い合わせ頂きたい旨紹介があった。また会員に対して、1994年に東京でIAHAの大会が開催されるので、積極的にご参加頂くよう要請された。

4. 池端編集委員より、『東南アジア一歴史と文化』第21号の編集状況について報告があった。今号より文献目録の採録時期や作業体制を、大学院生に作業協力をあおぐ関係上、若干変更したこと、また今後英文レジュメのネイティブ・チェックを厳格に行う体制を確立するなどして、海外の研究者にも利用可能な会誌を発行するよう努めるべきであることが述べられた。

5. 重松選挙管理委員長の代理として、伊東選挙管理委員より、第14期東南アジア史学会会長候補者選考委員会委員の選出経過について報告があった（詳細については2頁参照）。ただ今回3名もの辞退者が発生したことについては、会長候補者選考委員会の日時を、選挙管理委員会が一方的に指定してしまったことも原因の一つである。従って今後は、このような事態を極力避けるため、会長候補者選考委員会を複数日に設定するか、予め当選者7名の予定を調整するなどの方策をとるべきであることが提案された。

《審議事項》

1. 1992年度春季研究大会について、桜井大会委員より、6月13日、14日の両日、東京大学本郷キャンパスの山上会館で開催することが提案され、全会一致で承認された。

2. 次期会長の推薦経過について、生田会長候補者選考委員長より報告があった。1991年11月29日午後2時より南山大学で委員会を開催し、慎重審議の結果、上智大学教授石澤良昭会員を推薦する旨の説明があり、石澤良昭会員を第14期東南アジア史学会会長に選出することが全会一致で決定された。

続いて、明石会長より2年間の在任中における会員諸氏のご協力について感謝する旨の挨拶があった。

最後に、山本達郎会員より明石会長に対し謝辞が述べられた。

第13期第4回委員会摘録

1991年12月1日、南山大学で明石会長が議長となり、総会案件及び『東南アジアー歴史と文化ー』の英文レジュメに関わる問題と次期委員会への申し送り事項について審議した。

英文レジュメのネイティブ・チェックについては、毎号一件あたり一万円を目処に予算化し、全体をこの範囲内で行うことが了承された。

次期委員会への申し送り事項としては、

1. 第12期委員会のもとに設けられた将来計画検討委員会の答申の中で示された努力目標のうち、『東南アジアー歴史と文化ー』と外国の出版物との交換を進めることや、本誌その他の出版物の企画において、日本の東南アジア史研究の成果を諸外国に知らせる方策を具体的に検討することが残されている。
2. 委員会の継続性を維持するという観点から、新会長の下で組織される新委員会のメンバーとして旧委員会の半数を残しておくなどの措置をとることが望ましい。
3. 現在一般会費と学生会費の差が500円であり、これは事務を煩雑にするだけで実質的にあまり意味がない。学生会費と一般会費の差をもっと広げる方向で検討することが望ましい。

以上3点が了承された。

1991年度会計中間報告（1991年1月1日～11月20日）

（1991年秋季大会関係費用を含まず） 1991年12月1日

会計担当委員 深見純生

I. 収入の部		II. 支出の部	
1. 会員会費（161名）	1,204,500	1. 会誌関係	円
2. 預貯金利子	43,883	(1)誌代（371冊）	1,068,480
3. 会誌学会在庫売上	2,000	(2)編集費（編集委員会）	69,768
4. 業績目録（本体）売上	4,000	(3)事務費（事務局）	4,119
5. 業績目録（補遺）売上	8,000	小計	1,142,367
6. 会員名簿売上	0	2. 会報関係	
7. 前年度繰越金	2,163,667	(1)作成費	148,000
合計	3,426,050	(2)郵送費	34,450
		小計	182,450
III. 残額		3. 大会関係	
収入合計	3,426,050円	(1)大会予報費	25,648
		(2)プログラム等	

最後に、山本達郎会員より明石会長に対し謝辞が述べられた。

第13期第4回委員会摘録

1991年12月1日、南山大学で明石会長が議長となり、総会案件及び『東南アジアー歴史と文化ー』の英文レジュメに関わる問題と次期委員会への申し送り事項について審議した。

英文レジュメのネイティブ・チェックについては、毎号一件あたり一万円を目処に予算化し、全体をこの範囲内で行うことが了承された。

次期委員会への申し送り事項としては、

1. 第12期委員会のもとに設けられた将来計画検討委員会の答申の中で示された努力目標のうち、『東南アジアー歴史と文化ー』と外国の出版物との交換を進めることや、本誌その他の出版物の企画において、日本の東南アジア史研究の成果を諸外国に知らせる方策を具体的に検討することが残されている。
2. 委員会の継続性を維持するという観点から、新会長の下で組織される新委員会のメンバーとして旧委員会の半数を残しておくなどの措置をとることが望ましい。
3. 現在一般会費と学生会費の差が500円であり、これは事務を煩雑にするだけで実質的にあまり意味がない。学生会費と一般会費の差をもっと広げる方向で検討することが望ましい。

以上3点が了承された。

1991年度会計中間報告（1991年1月1日～11月20日）

（1991年秋季大会関係費用を含まず） 1991年12月1日

会計担当委員 深見純生

I. 収入の部		II. 支出の部	
1. 会員会費（161名）	1,204,500	1. 会誌関係	円
2. 預貯金利子	43,883	(1)誌代（371冊）	1,068,480
3. 会誌学会在庫売上	2,000	(2)編集費（編集委員会）	69,768
4. 業績目録（本体）売上	4,000	(3)事務費（事務局）	4,119
5. 業績目録（補遺）売上	8,000	小計	1,142,367
6. 会員名簿売上	0	2. 会報関係	
7. 前年度繰越金	2,163,667	(1)作成費	148,000
合計	3,426,050	(2)郵送費	34,450
		小計	182,450
III. 残額		3. 大会関係	
収入合計	3,426,050円	(1)大会予報費	25,648
		(2)プログラム等	

<u>支出合計</u>	2,703,427	
残額	722,623	
		作成・郵送費 80,630
		(3)運営費 187,648
		小計 293,926
4.	委員会・事務局関係	
	(1)交通・通信費	82,937
	(2)消耗品費	1,737
	小計	84,674
	以上合計	1,703,417
5.	研究助成基金への貸付	1,000,010
	以上総計	2,703,427

創立25周年記念（第46回）研究大会報告

東南アジア史学会創立25周年記念（第46回）研究大会は1991年11月30日と12月1日の両日、南山大学で開催され、創立25周年を記念するにふさわしい発表・議論が展開され、成功裡に終わった。また、それに先立って11月29日に名古屋国際センターで開かれた記念公開講演会には多数の市民の参集が得られ、学会の節目を記念するにふさわしい結果となった。プログラムと講演および発表要旨は以下のとおりである。

11月29日（金）

創立25周年記念公開講演会

18：15 開会の辞	東南アジア史学会会長 明石 陽至
18：30 商人国家としてのアユタヤ	上智大学 石井 米雄
19：30 東南アジア史の中の日本—新しいエトスを求めて—	早稲田大学 後藤 乾一

11月30日（土）

9：00 開会の辞	会長 明石 陽至（南山大学）
-----------	----------------

自由研究発表

9：15 アジアにおける植民地主義とキリスト教宣教—1910年エディンバラ国際宣教会議の討議を中心にして—	桃山学院大学 蔵田 雅彦
10：00 北スマトラにおける港市国家と後背地	天理大学 弘末 雅士
10：45 15・16世紀のチャンパーとヴェトナムとの関係	ヴェトナム史研究者 和田 正彦

11：30 英国小説の中のインド・東南アジア—白人の責務から「支配するものが腐る」まで—	摂南大学 小泉 允雄
--	------------

シンポジウム「東南アジア研究の新しい展開」

14：00 趣旨説明	京都大学 土屋 健治
14：15 サーフィンとドンソン	
報告者	国学院大学非常勤講師 横倉 雅幸
討論者	上智大学 青柳 洋治
15：25 伝統国家論	
報告者	東京大学 関本 照夫
討論者	鹿児島大学 早瀬 晋三
18：30 レセプション（懇親会）	プリンセスガーデン・ホテル

12月1日（日）

前日午後よりシンポジウム続き

9：00 Loosely Structured Society

報告者	神戸大学	北原 淳
討論者	大東文化大学	堀井 健三

10：10 Age of Commerce

報告者	八千代国際大学	大木 昌
討論者	東京大学	桜井由躬雄

11：20 Culturalismについて

報告者	京都大学	土屋 健治
討論者	東京外国语大学	池端 雪浦

12：30 昼食（委員会）

13：30 会員総会

14：30 記念講演 “Religion and Anticolonial Movement in Southeast Asian History”
ジェームズ・クック大学 レイナルド・イレート

15：30 シンポジウム総合討論

17：00 閉会の辞

公開講演会要旨

商人国家としてのアユタヤ 石井米雄

タイ有数の観光遺跡として日本人にも親しまれているアユタヤは、14世紀の半ばから18世紀の末にいたる400年の間、東南アジア有数の大國として繁栄したタイ王国の首都である。アユタヤ王国はなぜ繁栄し、そしてなぜ滅亡したのか。交易を背景に繁栄したタイ人の国家とその成り立ちを考えながら、現在につながるタイ王国の特質の一端をさぐってみたい。



東南アジア史のなかの日本

—新しい関わりのエトスを求めて— 後藤乾一

非ヨーロッパ世界にありながら西欧近代を手に入れようとした、それに半ば成功した日本。そして西欧近代によって暗闇の世界に押し込められた東南アジア。この両者は、前大戦中の支配・被支配関係をはさみ、その前後、各50年ほどの関係を築き今日に至っている。

この一世紀の歩みのなかで、東南アジアからみると、日本の存在は私たち日本人が考える以上に大きな、ときに重い意味をもってきた。端的にいうならば、「極東」にあって「極西」の国＝日本は、東南アジアにとって大きな魅力の源泉であり、かつまた絶えざる脅威の対象でもあった。

本講では、首相と天皇が相次いで東南アジアを訪問した今日の時点に立って、近・現代史における日本と東南アジアの関係を振り返りつつ、マジック・ミラーのように一方の側が他方を見れないというのではなく、眞の意味で等身大で理解し合える関係を築くためのささやかな一素材を提供してみたい。



個人研究発表要旨

アジアにおける植民地主義とキリスト教宣教

—1910年エディンバラ国際宣教会議の討議を中心にして— 蔵田雅彦

アジア・第三世界におけるキリスト教宣教は、植民地主義と帝国主義の尖兵の役割を担い、その過程で商人・宣教師・軍隊が三位一体となっていた、と指摘される。初期のポルトガル・スペインの海外宣教は政教一致の色彩を色濃く持ち、イギリスやオランダのキリスト教宣教も、国家の利害を代弁していた東インド会社との深い関わりの中で進められた。しかし、そのような宣教政策も、土着の諸宗教との葛藤や、宣教地の民衆による反キリスト教運動などの衝撃を受けて、徐々に再考を迫られる。戦後、世界教会協議会の一部となった国際宣教協議会 (International Missionary Council) は、このような本国および宣教地における国家と教会の関係など宣教活動に関わるさ

公開講演会要旨

商人国家としてのアユタヤ 石井米雄

タイ有数の観光遺跡として日本人にも親しまれているアユタヤは、14世紀の半ばから18世紀の末にいたる400年の間、東南アジア有数の大國として繁栄したタイ王国の首都である。アユタヤ王国はなぜ繁栄し、そしてなぜ滅亡したのか。交易を背景に繁栄したタイ人の国家とその成り立ちを考えながら、現在につながるタイ王国の特質の一端をさぐってみたい。



東南アジア史のなかの日本

—新しい関わりのエトスを求めて— 後藤乾一

非ヨーロッパ世界にありながら西欧近代を手に入れようとした、それに半ば成功した日本。そして西欧近代によって暗闇の世界に押し込められた東南アジア。この両者は、前大戦中の支配・被支配関係をはさみ、その前後、各50年ほどの関係を築き今日に至っている。

この一世紀の歩みのなかで、東南アジアからみると、日本の存在は私たち日本人が考える以上に大きな、ときに重い意味をもってきた。端的にいうならば、「極東」にあって「極西」の国＝日本は、東南アジアにとって大きな魅力の源泉であり、かつまた絶えざる脅威の対象でもあった。

本講では、首相と天皇が相次いで東南アジアを訪問した今日の時点に立って、近・現代史における日本と東南アジアの関係を振り返りつつ、マジック・ミラーのように一方の側が他方を見れないというのではなく、眞の意味で等身大で理解し合える関係を築くためのささやかな一素材を提供してみたい。



個人研究発表要旨

アジアにおける植民地主義とキリスト教宣教

—1910年エディンバラ国際宣教会議の討議を中心にして— 蔵田雅彦

アジア・第三世界におけるキリスト教宣教は、植民地主義と帝国主義の尖兵の役割を担い、その過程で商人・宣教師・軍隊が三位一体となっていた、と指摘される。初期のポルトガル・スペインの海外宣教は政教一致の色彩を色濃く持ち、イギリスやオランダのキリスト教宣教も、国家の利害を代弁していた東インド会社との深い関わりの中で進められた。しかし、そのような宣教政策も、土着の諸宗教との葛藤や、宣教地の民衆による反キリスト教運動などの衝撃を受けて、徐々に再考を迫られる。戦後、世界教会協議会の一部となった国際宣教協議会 (International Missionary Council) は、このような本国および宣教地における国家と教会の関係など宣教活動に関わるさ

公開講演会要旨

商人国家としてのアユタヤ 石井米雄

タイ有数の観光遺跡として日本人にも親しまれているアユタヤは、14世紀の半ばから18世紀の末にいたる400年の間、東南アジア有数の大國として繁栄したタイ王国の首都である。アユタヤ王国はなぜ繁栄し、そしてなぜ滅亡したのか。交易を背景に繁栄したタイ人の国家とその成り立ちを考えながら、現在につながるタイ王国の特質の一端をさぐってみたい。



東南アジア史のなかの日本

—新しい関わりのエトスを求めて— 後藤乾一

非ヨーロッパ世界にありながら西欧近代を手に入れようとした、それに半ば成功した日本。そして西欧近代によって暗闇の世界に押し込められた東南アジア。この両者は、前大戦中の支配・被支配関係をはさみ、その前後、各50年ほどの関係を築き今日に至っている。

この一世紀の歩みのなかで、東南アジアからみると、日本の存在は私たち日本人が考える以上に大きな、ときに重い意味をもってきた。端的にいうならば、「極東」にあって「極西」の国＝日本は、東南アジアにとって大きな魅力の源泉であり、かつまた絶えざる脅威の対象でもあった。

本講では、首相と天皇が相次いで東南アジアを訪問した今日の時点に立って、近・現代史における日本と東南アジアの関係を振り返りつつ、マジック・ミラーのように一方の側が他方を見れないというのではなく、眞の意味で等身大で理解し合える関係を築くためのささやかな一素材を提供してみたい。



個人研究発表要旨

アジアにおける植民地主義とキリスト教宣教

—1910年エディンバラ国際宣教会議の討議を中心にして— 蔵田雅彦

アジア・第三世界におけるキリスト教宣教は、植民地主義と帝国主義の尖兵の役割を担い、その過程で商人・宣教師・軍隊が三位一体となっていた、と指摘される。初期のポルトガル・スペインの海外宣教は政教一致の色彩を色濃く持ち、イギリスやオランダのキリスト教宣教も、国家の利害を代弁していた東インド会社との深い関わりの中で進められた。しかし、そのような宣教政策も、土着の諸宗教との葛藤や、宣教地の民衆による反キリスト教運動などの衝撃を受けて、徐々に再考を迫られる。戦後、世界教会協議会の一部となった国際宣教協議会 (International Missionary Council) は、このような本国および宣教地における国家と教会の関係など宣教活動に関わるさ

さまざまな問題点を協議するために、1910年、エдинバラで世界会議を持った。同会議の第7分科会は「宣教と政府」を主題にしていたが、その報告書には、アジアでは日本、中国、インド、オランダ領東インドの状況が報告されている。同会議の報告と討議を見ると、宣教師が西欧諸国の植民地主義と同一視されてきたことの問題性がはつきりと指摘されている。しかし、西欧の文明を伝達し被宣教地の民衆の福祉を向上させるという「文明扶植論」は極めて濃厚であり、また福音を全世界に伝えねばならないとする「使命感」も強い。植民地における宣教政策を世界的に調整することに重きを置いた同会議では、被宣教地での軋轢を回避するために、政教分離（政治不干渉）、原住民の宗教・社会制度（とくにイスラム）に対する慎重な態度、宣教活動や原住民クリスチヤンへの圧迫があっても本国政府の介入を要請すべきでないこと等、いくつかの原則が提言されている。世界の植民地政策の流れが直接統治から間接統治に移行したことに応じて、宣教政策も政教一致から政教分離へ移行したものと思われる。また「倫理政策」等に呼応して、教育や住民の福祉向上に対する宣教師の役割が強調されている。全体的に西欧中心主義は拭えず、植民地における軋轢に対する自己批判的分析も弱いが、戦後のプロテスタント教会の世界宣教の出発点としての意味は大きい。

北スマトラにおける港市国家と後背地——弘末雅士

北スマトラは古くから国際海洋交易活動の舞台の一つとなり、河川の河口付近に港市国家の成立を見た。とりわけ15～17世紀にかけて海洋交易活動が活性化した時代には、アチエ、パサイ、バルス、アル（デリ）等の港市国家が隆盛した。また18世紀終わりから19世紀前半にかけて、ペナンやシンガポールとの交易が活発化すると、東岸のデリ、アサハン、シアク等が繁栄した。これらの港市の後背地は、豊富な降雨によって形成された森林や河川盆地を有し、港市に森林生産物や米、家畜を始め、胡椒、タバコ、ガンビール等の商品作物また奴隸を搬出した。

報告者は、従来交易活動の活性化が港市の後背地に対する影響力の強化をもたらし、文化的にも前者が後者を組み込んでいくと指摘されたのに対し、内陸バタック地区と周辺港市との関係を通して、港市と後背地とのネットワークの強化が必ずしも前者の後者に対する一義的支配に結びつかず、後背地側に港市の経済活動を補完する権威が形成されたことを説明したい。

港市は、上述した時期後背地からの産物の調達をはかるため、バタック地区の産地にバタック族の代官を任命し、産地との関係の強化を図った。内陸部の人々の港市支配者に対する尊崇の念は強く、産地と港市との交易関係は維持された。ところでこの一方で、内陸部の人々は、自らの生産活動の基盤を保障する権威を必要としていた。港市支配者は、後背地の人々から豊穣をもたらす力を有すると信じられたが、実際港市から内陸部に食料を供給することはきわめて困難であった。バタック地区の内陸部トバ湖畔に農耕を司る力を有すると信奉された神聖王シ＝シンガ＝マンガラジャが成

さまざまな問題点を協議するために、1910年、エдинバラで世界会議を持った。同会議の第7分科会は「宣教と政府」を主題にしていたが、その報告書には、アジアでは日本、中国、インド、オランダ領東インドの状況が報告されている。同会議の報告と討議を見ると、宣教師が西欧諸国の植民地主義と同一視されてきたことの問題性がはつきりと指摘されている。しかし、西欧の文明を伝達し被宣教地の民衆の福祉を向上させるという「文明扶植論」は極めて濃厚であり、また福音を全世界に伝えねばならないとする「使命感」も強い。植民地における宣教政策を世界的に調整することに重きを置いた同会議では、被宣教地での軋轢を回避するために、政教分離（政治不干渉）、原住民の宗教・社会制度（とくにイスラム）に対する慎重な態度、宣教活動や原住民クリスチヤンへの圧迫があっても本国政府の介入を要請すべきでないこと等、いくつかの原則が提言されている。世界の植民地政策の流れが直接統治から間接統治に移行したことに応じて、宣教政策も政教一致から政教分離へ移行したものと思われる。また「倫理政策」等に呼応して、教育や住民の福祉向上に対する宣教師の役割が強調されている。全体的に西欧中心主義は拭えず、植民地における軋轢に対する自己批判的分析も弱いが、戦後のプロテスタント教会の世界宣教の出発点としての意味は大きい。

北スマトラにおける港市国家と後背地——弘末雅士

北スマトラは古くから国際海洋交易活動の舞台の一つとなり、河川の河口付近に港市国家の成立を見た。とりわけ15～17世紀にかけて海洋交易活動が活性化した時代には、アチエ、パサイ、バルス、アル（デリ）等の港市国家が隆盛した。また18世紀終わりから19世紀前半にかけて、ペナンやシンガポールとの交易が活発化すると、東岸のデリ、アサハン、シアク等が繁栄した。これらの港市の後背地は、豊富な降雨によって形成された森林や河川盆地を有し、港市に森林生産物や米、家畜を始め、胡椒、タバコ、ガンビール等の商品作物また奴隸を搬出した。

報告者は、従来交易活動の活性化が港市の後背地に対する影響力の強化をもたらし、文化的にも前者が後者を組み込んでいくと指摘されたのに対し、内陸バタック地区と周辺港市との関係を通して、港市と後背地とのネットワークの強化が必ずしも前者の後者に対する一義的支配に結びつかず、後背地側に港市の経済活動を補完する権威が形成されたことを説明したい。

港市は、上述した時期後背地からの産物の調達をはかるため、バタック地区の産地にバタック族の代官を任命し、産地との関係の強化を図った。内陸部の人々の港市支配者に対する尊崇の念は強く、産地と港市との交易関係は維持された。ところでこの一方で、内陸部の人々は、自らの生産活動の基盤を保障する権威を必要としていた。港市支配者は、後背地の人々から豊穣をもたらす力を有すると信じられたが、実際港市から内陸部に食料を供給することはきわめて困難であった。バタック地区の内陸部トバ湖畔に農耕を司る力を有すると信奉された神聖王シ＝シンガ＝マンガラジャが成

立したのは、こうした事情による。そして港市側もこの神聖王の権威を認め、後背地との相互依存関係を強化することで、上述した時代に対処したのであった。

15・16世紀のチャンパーとヴェトナムとの関係——和田正彦

チャンパーの歴史についての専著には、G.マスペロの『チャンパー王国』とR.C.マジュムダールの『チャンパー』があることはつとに知られている。しかしヴェトナム後黎朝の南進政策によって1471年に事実上ヴェトナムの属国になって以後の歴史については、この2書も記すところは極めて少なく、ほかにこの時代のチャンパーの歴史を扱った研究論文も皆無に近い状況である。

ヴェトナム後黎朝の聖宗は1471年にその都ヴィジャヤ（闍婆城、現ヴィン・ディン）を包囲して3万人を捕虜にし、4万人を殺したのち、チャンパーの旧領の5分の4を併合して廣南・升華の両承宣を設置した。その後、南方のパーンドゥランガ（藩郎、現ファン・ラン）に移ったチャンパーは、1693年には廣南の阮氏の“南進”によって、その名を順城鎮と改められて藩属国となり、その独立性を奪われた。

しかし、チャンパーは、1471年の後黎朝の聖宗の親征以後、1832年に阮朝による改土帰流によって順城鎮が廃止され、ヴェトナム人官吏によって直接統治されるまでは、はじめは後黎朝の、16世紀後半以降18世紀末までの鄭阮両氏による南北抗争期は廣南の阮氏の、そして19世紀初頭は阮朝の支配下で、時代によって程度の差はあるが、領土を侵蝕されつつも、占城国および順城鎮として半独立の地位を保っていたことが、『大越史記全書』、『欽定越史通鑑綱目』、『大南寔錄』などヴェトナム側の史料から知られるのである。

さらに注目すべきことは、事実上ヴェトナムの支配下に入った1471年以降も、チャンパーは中国の明朝と朝貢関係を数十年にわたって維持していたことである。このことは『明實錄』の記事から知られる。この事実はどのようなヴェトナム・チャンパー両国内事情および国際関係を反映したものであったかを、『明實錄』の記事やヴェトナム側の史料から考えてみるのが今回の発表の目的である。

英国小説のなかのインド・東南アジア

—“白人の責務”から“支配するものが腐る”まで——小泉允雄

英国の近代小説にはインドに生きたキプリングや航海者として南の島々を体験したJ.コンラッドを始祖とする、いわば「インド・東南アジアもの」というべき、一つの伝統がある。それは『インドへの道』のフォスター、『ビルマの日々』のオーウェルで終わることなく、戦後の現代作家たちにも引き継がれている。帝国主義に栄光を見たキプリングから、「威張るものが先に腐る」ことを発見したオーウェルまで、その流れは、植民者側の帝国意識やアジア・イメージの変化の歴史を写し出す。それとともに、それらの小説群は植民地時代末期のビルマやマラヤでの白人社会の悲喜劇をいきいき

立したのは、こうした事情による。そして港市側もこの神聖王の権威を認め、後背地との相互依存関係を強化することで、上述した時代に対処したのであった。

15・16世紀のチャンパーとヴェトナムとの関係——和田正彦

チャンパーの歴史についての専著には、G.マスペロの『チャンパー王国』とR.C.マジュムダールの『チャンパー』があることはつとに知られている。しかしヴェトナム後黎朝の南進政策によって1471年に事実上ヴェトナムの属国になって以後の歴史については、この2書も記すところは極めて少なく、ほかにこの時代のチャンパーの歴史を扱った研究論文も皆無に近い状況である。

ヴェトナム後黎朝の聖宗は1471年にその都ヴィジャヤ（闍婆城、現ヴィン・ディン）を包囲して3万人を捕虜にし、4万人を殺したのち、チャンパーの旧領の5分の4を併合して廣南・升華の両承宣を設置した。その後、南方のパーンドゥランガ（藩郎、現ファン・ラン）に移ったチャンパーは、1693年には廣南の阮氏の“南進”によって、その名を順城鎮と改められて藩属国となり、その独立性を奪われた。

しかし、チャンパーは、1471年の後黎朝の聖宗の親征以後、1832年に阮朝による改土帰流によって順城鎮が廃止され、ヴェトナム人官吏によって直接統治されるまでは、はじめは後黎朝の、16世紀後半以降18世紀末までの鄭阮両氏による南北抗争期は廣南の阮氏の、そして19世紀初頭は阮朝の支配下で、時代によって程度の差はあるが、領土を侵蝕されつつも、占城国および順城鎮として半独立の地位を保っていたことが、『大越史記全書』、『欽定越史通鑑綱目』、『大南寔錄』などヴェトナム側の史料から知られるのである。

さらに注目すべきことは、事実上ヴェトナムの支配下に入った1471年以降も、チャンパーは中国の明朝と朝貢関係を数十年にわたって維持していたことである。このことは『明實錄』の記事から知られる。この事実はどのようなヴェトナム・チャンパー両国内事情および国際関係を反映したものであったかを、『明實錄』の記事やヴェトナム側の史料から考えてみるのが今回の発表の目的である。

英国小説のなかのインド・東南アジア

—“白人の責務”から“支配するものが腐る”まで——小泉允雄

英国の近代小説にはインドに生きたキプリングや航海者として南の島々を体験したJ.コンラッドを始祖とする、いわば「インド・東南アジアもの」というべき、一つの伝統がある。それは『インドへの道』のフォスター、『ビルマの日々』のオーウェルで終わることなく、戦後の現代作家たちにも引き継がれている。帝国主義に栄光を見たキプリングから、「威張るものが先に腐る」ことを発見したオーウェルまで、その流れは、植民者側の帝国意識やアジア・イメージの変化の歴史を写し出す。それとともに、それらの小説群は植民地時代末期のビルマやマラヤでの白人社会の悲喜劇をいきいき

立したのは、こうした事情による。そして港市側もこの神聖王の権威を認め、後背地との相互依存関係を強化することで、上述した時代に対処したのであった。

15・16世紀のチャンパーとヴェトナムとの関係——和田正彦

チャンパーの歴史についての専著には、G.マスペロの『チャンパー王国』とR.C.マジュムダールの『チャンパー』があることはつとに知られている。しかしヴェトナム後黎朝の南進政策によって1471年に事実上ヴェトナムの属国になって以後の歴史については、この2書も記すところは極めて少なく、ほかにこの時代のチャンパーの歴史を扱った研究論文も皆無に近い状況である。

ヴェトナム後黎朝の聖宗は1471年にその都ヴィジャヤ（闍婆城、現ヴィン・ディン）を包囲して3万人を捕虜にし、4万人を殺したのち、チャンパーの旧領の5分の4を併合して廣南・升華の両承宣を設置した。その後、南方のパーンドゥランガ（藩郎、現ファン・ラン）に移ったチャンパーは、1693年には廣南の阮氏の“南進”によって、その名を順城鎮と改められて藩属国となり、その独立性を奪われた。

しかし、チャンパーは、1471年の後黎朝の聖宗の親征以後、1832年に阮朝による改土帰流によって順城鎮が廃止され、ヴェトナム人官吏によって直接統治されるまでは、はじめは後黎朝の、16世紀後半以降18世紀末までの鄭阮両氏による南北抗争期は廣南の阮氏の、そして19世紀初頭は阮朝の支配下で、時代によって程度の差はあるが、領土を侵蝕されつつも、占城国および順城鎮として半独立の地位を保っていたことが、『大越史記全書』、『欽定越史通鑑綱目』、『大南寔錄』などヴェトナム側の史料から知られるのである。

さらに注目すべきことは、事実上ヴェトナムの支配下に入った1471年以降も、チャンパーは中国の明朝と朝貢関係を数十年にわたって維持していたことである。このことは『明實錄』の記事から知られる。この事実はどのようなヴェトナム・チャンパー両国内事情および国際関係を反映したものであったかを、『明實錄』の記事やヴェトナム側の史料から考えてみるのが今回の発表の目的である。

英国小説のなかのインド・東南アジア

—“白人の責務”から“支配するものが腐る”まで——小泉允雄

英国の近代小説にはインドに生きたキプリングや航海者として南の島々を体験したJ.コンラッドを始祖とする、いわば「インド・東南アジアもの」というべき、一つの伝統がある。それは『インドへの道』のフォスター、『ビルマの日々』のオーウェルで終わることなく、戦後の現代作家たちにも引き継がれている。帝国主義に栄光を見たキプリングから、「威張るものが先に腐る」ことを発見したオーウェルまで、その流れは、植民者側の帝国意識やアジア・イメージの変化の歴史を写し出す。それとともに、それらの小説群は植民地時代末期のビルマやマラヤでの白人社会の悲喜劇をいきいき

と描く。

植民地時代のインド・東南アジアの歴史には、支配された側のみではなく、支配した側も、その当否や善悪は抜きにして、当然参加していた。むろんこれは、植民地経営史や社会経済史の常識であるが、支配した側、それも“現場”で支配した側の心理や意識が研究されることは、それほどなかったといえる。私の試みは、自分がこれまで永く読み続けてきた英国の小説の世界を整理し、支配者側の意識や精神の歴史と結びつけることである。

歴史研究のなかでイメージや“曖昧なもの”をとりあげることに異論はないとしても、もっぱら小説を題材として、何がどこまで論じられるか、問題意識や方法論のうえで、諸兄姉のご批判をおおぎたい。

シンポジウム「東南アジア研究の新しい展開」

「ドンソン・サーフィン及びメコン — trading network の確立」

横倉雅幸

I. 西暦紀元前後のローカルセンター

初期鉄器時代の段階にあった2, 3BC~2ADの大陵東南アジアには、ローカルセンターを形成し金属器や装身具を始めとして独自の文化要素を生み出した地域が複数存在した。すなわちドンソン (Dong Son) 青銅器群が製作された北部・中北部ベトナム、サーフィン (Sa Huynh) 文化が展開した中部ベトナム、そしてバンチエンードンナイ (Ban Chiang-Dong Nai) 系文化が展開したメコン川中下流域がそれである。このうち北部・中北部ベトナムとメコン流域には青銅を重要視する思想が存在し、祭器・宝器として青銅器が大量に製作されたが、中部ベトナムにはそのような思想が存在せず、青銅器製作は行われなかった。

II. 文化要素の拡散

これらのローカルセンターが生み出した様々な文化要素（青銅器、装身具、墓制）はしかし、単独あるいは complex の形で本来の文化領域を離れ、東南アジアの極めて広範な空間に拡散して行く。そのような要素としてヘーガー I 式ベトナム型銅鼓 (ドンソン青銅器群構成要素), Ling-Ling-O 様式の装身具類、甕棺 (以上サーフィン文化の構成要素), バンチエンードンナイ系青銅器群を挙げることができる。さらに雲南からタイ中部に進出した滇西青銅器群も海を渡っている。

ヘーガー I 式銅鼓は他のドンソン系遺物から遊離して単独でインドシナ及びマレー・インドネシア方面へ拡散しており、これは商品として輸出されたとみられる。Ling-Ling-O は中部ベトナム以外でも甕棺と共に出土しており、その拡散はサーフィン文化の担い手であった集団が南シナ海沿岸に拡散し、航海通商活動を行ったことを意味する。ベトナムからタイ方面への銅鼓の輸送は、青銅器を祭器・宝器として扱わないこの集団によってなされた。バンチエン・ドンナイ系青銅器は鋳型の出土例も含め complex の形でメコン流域からマレー、インドネシアに拡散し、島嶼部で鋳造され

と描く。

植民地時代のインド・東南アジアの歴史には、支配された側のみではなく、支配した側も、その当否や善悪は抜きにして、当然参加していた。むろんこれは、植民地経営史や社会経済史の常識であるが、支配した側、それも“現場”で支配した側の心理や意識が研究されることは、それほどなかったといえる。私の試みは、自分がこれまで永く読み続けてきた英国の小説の世界を整理し、支配者側の意識や精神の歴史と結びつけることである。

歴史研究のなかでイメージや“曖昧なもの”をとりあげることに異論はないとしても、もっぱら小説を題材として、何がどこまで論じられるか、問題意識や方法論のうえで、諸兄姉のご批判をおおぎたい。

シンポジウム「東南アジア研究の新しい展開」

「ドンソン・サーフィン及びメコン — trading network の確立」

横倉雅幸

I. 西暦紀元前後のローカルセンター

初期鉄器時代の段階にあった2, 3BC~2ADの大陵東南アジアには、ローカルセンターを形成し金属器や装身具を始めとして独自の文化要素を生み出した地域が複数存在した。すなわちドンソン (Dong Son) 青銅器群が製作された北部・中北部ベトナム、サーフィン (Sa Huynh) 文化が展開した中部ベトナム、そしてバンチエンードンナイ (Ban Chiang-Dong Nai) 系文化が展開したメコン川中下流域がそれである。このうち北部・中北部ベトナムとメコン流域には青銅を重要視する思想が存在し、祭器・宝器として青銅器が大量に製作されたが、中部ベトナムにはそのような思想が存在せず、青銅器製作は行われなかった。

II. 文化要素の拡散

これらのローカルセンターが生み出した様々な文化要素（青銅器、装身具、墓制）はしかし、単独あるいは complex の形で本来の文化領域を離れ、東南アジアの極めて広範な空間に拡散して行く。そのような要素としてヘーガー I 式ベトナム型銅鼓 (ドンソン青銅器群構成要素), Ling-Ling-O 様式の装身具類、甕棺 (以上サーフィン文化の構成要素), バンチエンードンナイ系青銅器群を挙げることができる。さらに雲南からタイ中部に進出した滇西青銅器群も海を渡っている。

ヘーガー I 式銅鼓は他のドンソン系遺物から遊離して単独でインドシナ及びマレー・インドネシア方面へ拡散しており、これは商品として輸出されたとみられる。Ling-Ling-O は中部ベトナム以外でも甕棺と共に出土しており、その拡散はサーフィン文化の担い手であった集団が南シナ海沿岸に拡散し、航海通商活動を行ったことを意味する。ベトナムからタイ方面への銅鼓の輸送は、青銅器を祭器・宝器として扱わないこの集団によってなされた。バンチエン・ドンナイ系青銅器は鋳型の出土例も含め complex の形でメコン流域からマレー、インドネシアに拡散し、島嶼部で鋳造され

たものも認められるため、その分布地域にメコン流域の集団が拡散していったと考えられる。タイからインドネシアへの銅鼓の輸送は彼等が行ったとみられる。サーフィン集団は銅鼓を商品として扱ったが、メコン流域の集団は青銅器を祭器・宝器として扱うばかりかより古いタイプの銅鼓を受け入れていたため、サーフィン集団を介してベトナム型銅鼓を購入し、マレー・インドネシア方面にはそれらの銅鼓と共に拡散していった。この集団が拡散した結果、農耕技術・農耕儀礼を含むメコン流域の技術と思想がインドネシアに移植された。マレー半島からスンダ列島に進んだ理由のひとつとして、青銅の原料である銅と錫の鉱脈の存在を挙げることができる。

III. 航海通商システムと通商ネットワーク

航海通商という経済活動システムはおそらく中器新石期時代頃からインドシナ沿岸の農耕漁撈民の間で次第に発展してきたとみられるが、航海通商集団の出現は Hoi An 付近のサーフィン遺跡群がラオスの産物を北部・中北部ベトナムや嶺南へ輸出する港市に変貌した 3~2BC 頃である。さらにサーフィン文化がバンチェン-ドンナイ系文化が展開していたメコン流域に及んだ時、サーフィン集団が開拓した南シナ海沿岸ルートはメコン水系というインドシナ内陸部の情報伝達網と結合し、航海通商システムに接したバンチェン-ドンナイ系文化の担い手の一部は新たな航海通商民へと変身する。始めから巨大な後背地を従えて成立したインドシナ半島南部のこの航海通商集団の中から扶南が出現する。ラオスとの関係を深め交州・広州との交易を発展させたサーフィン集団は林邑としてまとまってゆく。

「伝統国家論」関本照夫

「伝統国家」ということばは便宜的なもので、それ自体すでにいろいろな議論すべき問題をふくんでいる。ともあれこの発表では、まず、1) 18世紀から20世紀にかけて西欧の植民地システムにより変形され、近代世界に組み込まれる以前に、東南アジアの国家ないし成層的・求心的政体がしめした特徴について、これまでの諸論をふりかえり、論点を整理する。また最後に、2) 現代に属する伝統、現代からふりかえられた伝統についても考えてみたい。つまり、今日の東南アジア政治を研究するのに、土着の政治の伝統なるものをどう考え、どう扱ったらよいかということである。

過去の研究は、小地域ごとの王朝の交代史、ついでアンコール、アユタヤなどとくに目立った王朝の個々の像を描きだすことに集中していた。キーワードは「インド化された国家」であり、国家・王権などの概念自体についてとくに新しい考察がなされることはなかった。これに対し1970年代以降になると、「インド的」「国家」「王権」などの概念や、既製の集権的大王国の像がすべて相対化される。そして、多くの地域的中心間を縦横にむすぶ全体の関係の東南アジア的パターンについて、物質的・制度的支配の実態、正統性観念の根柢の両面から、さかんな議論がおこなわれるようになつた。そこでは、個々の国家像をそれとして描くよりも全地域に通じる共通のパターンが強調され、歴史を不可逆的・直線的变化と見て時代区分に専念するより、構造的波

たものも認められるため、その分布地域にメコン流域の集団が拡散していったと考えられる。タイからインドネシアへの銅鼓の輸送は彼等が行ったとみられる。サーフィン集団は銅鼓を商品として扱ったが、メコン流域の集団は青銅器を祭器・宝器として扱うばかりかより古いタイプの銅鼓を受け入れていたため、サーフィン集団を介してベトナム型銅鼓を購入し、マレー・インドネシア方面にはそれらの銅鼓と共に拡散していった。この集団が拡散した結果、農耕技術・農耕儀礼を含むメコン流域の技術と思想がインドネシアに移植された。マレー半島からスンダ列島に進んだ理由のひとつとして、青銅の原料である銅と錫の鉱脈の存在を挙げることができる。

III. 航海通商システムと通商ネットワーク

航海通商という経済活動システムはおそらく中器新石期時代頃からインドシナ沿岸の農耕漁撈民の間で次第に発展してきたとみられるが、航海通商集団の出現は Hoi An 付近のサーフィン遺跡群がラオスの産物を北部・中北部ベトナムや嶺南へ輸出する港市に変貌した 3~2BC 頃である。さらにサーフィン文化がバンチェン-ドンナイ系文化が展開していたメコン流域に及んだ時、サーフィン集団が開拓した南シナ海沿岸ルートはメコン水系というインドシナ内陸部の情報伝達網と結合し、航海通商システムに接したバンチェン-ドンナイ系文化の担い手の一部は新たな航海通商民へと変身する。始めから巨大な後背地を従えて成立したインドシナ半島南部のこの航海通商集団の中から扶南が出現する。ラオスとの関係を深め交州・広州との交易を発展させたサーフィン集団は林邑としてまとまってゆく。

「伝統国家論」関本照夫

「伝統国家」ということばは便宜的なもので、それ自体すでにいろいろな議論すべき問題をふくんでいる。ともあれこの発表では、まず、1) 18世紀から20世紀にかけて西欧の植民地システムにより変形され、近代世界に組み込まれる以前に、東南アジアの国家ないし成層的・求心的政体がしめした特徴について、これまでの諸論をふりかえり、論点を整理する。また最後に、2) 現代に属する伝統、現代からふりかえられた伝統についても考えてみたい。つまり、今日の東南アジア政治を研究するのに、土着の政治の伝統なるものをどう考え、どう扱ったらよいかということである。

過去の研究は、小地域ごとの王朝の交代史、ついでアンコール、アユタヤなどとくに目立った王朝の個々の像を描きだすことに集中していた。キーワードは「インド化された国家」であり、国家・王権などの概念自体についてとくに新しい考察がなされることはなかった。これに対し1970年代以降になると、「インド的」「国家」「王権」などの概念や、既製の集権的大王国の像がすべて相対化される。そして、多くの地域的中心間を縦横にむすぶ全体の関係の東南アジア的パターンについて、物質的・制度的支配の実態、正統性観念の根柢の両面から、さかんな議論がおこなわれるようになつた。そこでは、個々の国家像をそれとして描くよりも全地域に通じる共通のパターンが強調され、歴史を不可逆的・直線的变化と見て時代区分に専念するより、構造的波

動・循環のやはり共通のパターンが強調される。「銀河系政体」「劇場国家」「マンダラ的政治システム」等々、概念モデルは出そろってやや時間も経っているし、考古学上の新しい成果があり、また史料の再解釈も一部進行している。これからなされることは何だろうか。こうしたモデルを肉づけるより実証的な作業なのか、'70-'80年代モデルの批判なのか、それともまた別の道か。新しい方向を提示する用意はないが、議論のために現状の見取図を提示したい。

Loosely Structured Social System ————— 北原 淳

学問的コピーライターよろしく、次々と新概念を出すことを競いあっている感なきとしないアメリカの東南アジア研究の「パラダイム」のなかで、比較的長い生命力をもつのは“Loosely Structured Social System”(1950)であろう。ただし、その概念の理論的検討は1969年のエヴァース編集の“Loosely Structured Social System: Thailand in Comparative Perspective”(68年のAsian Studies学会シンポジウム記録) いらいそれほど進歩していない。報告者の理論的理解も以下のエヴァース編の到達点を一步も出ない。

あきらかにされたことは大略つぎの点であろう。①ルースの示すレベルは地位・役割体系としての固有の社会構造よりもむしろ、文化・パーソナリティーという文化体系のレベルである。②タイ社会の構造は文化体系と社会構造との間に齟齬がある特徴をもつ。③ルースさは方法論的個人主義に適合的な次元(対人関係、小集団等)へ適用するのに向いている。④社会構造と文化体系のどちらに注目するかで全く異なるタイ社会観が生まれる。⑤人類学者はルース概念におおむね賛成であるが、かなりの社会学者は反対である。

しかし問題の第1は、こうした理論的到達点をふまえた概念使用が自覚的になされていないことである。第2は、その結果として一体何がルースであるのか、その理論的レベルが一向にあきらかでないまま、「東南アジア社会はルースである」といった通念が一人歩きしていることである。あるいは第3は、変動期の現在は無用であるとして全く無視されていることである。

報告者自身はルースの次元はある種の基層文化であると考える。したがって変動下にある近代組織においても組織員の動機・態度形成といった点においてはいぜん影響力を残すであろう。論争のありかたは「日本の経営」にとっての日本文化の地位と同様である。

東南アジア史研究の方法

—Anthony Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce* をてがかりにして—

大木 昌

戦後の東南アジア史研究においての方法論の模索は常に行われてきた。最近の新しい方法論的試みとしてここでは、アンソニー・リード著『交易の時代の東南アジア

動・循環のやはり共通のパターンが強調される。「銀河系政体」「劇場国家」「マンダラ的政治システム」等々、概念モデルは出そろってやや時間も経っているし、考古学上の新しい成果があり、また史料の再解釈も一部進行している。これからなされることは何だろうか。こうしたモデルを肉づけるより実証的な作業なのか、'70-'80年代モデルの批判なのか、それともまた別の道か。新しい方向を提示する用意はないが、議論のために現状の見取図を提示したい。

Loosely Structured Social System ————— 北原 淳

学問的コピーライターよろしく、次々と新概念を出すことを競いあっている感なきとしないアメリカの東南アジア研究の「パラダイム」のなかで、比較的長い生命力をもつのは“Loosely Structured Social System”(1950)であろう。ただし、その概念の理論的検討は1969年のエヴァース編集の“Loosely Structured Social System: Thailand in Comparative Perspective”(68年のAsian Studies学会シンポジウム記録) いらいそれほど進歩していない。報告者の理論的理解も以下のエヴァース編の到達点を一步も出ない。

あきらかにされたことは大略つぎの点であろう。①ルースの示すレベルは地位・役割体系としての固有の社会構造よりもむしろ、文化・パーソナリティーという文化体系のレベルである。②タイ社会の構造は文化体系と社会構造との間に齟齬がある特徴をもつ。③ルースさは方法論的個人主義に適合的な次元(対人関係、小集団等)へ適用するのに向いている。④社会構造と文化体系のどちらに注目するかで全く異なるタイ社会観が生まれる。⑤人類学者はルース概念におおむね賛成であるが、かなりの社会学者は反対である。

しかし問題の第1は、こうした理論的到達点をふまえた概念使用が自覚的になされていないことである。第2は、その結果として一体何がルースであるのか、その理論的レベルが一向にあきらかでないまま、「東南アジア社会はルースである」といった通念が一人歩きしていることである。あるいは第3は、変動期の現在は無用であるとして全く無視されていることである。

報告者自身はルースの次元はある種の基層文化であると考える。したがって変動下にある近代組織においても組織員の動機・態度形成といった点においてはいぜん影響力を残すであろう。論争のありかたは「日本の経営」にとっての日本文化の地位と同様である。

東南アジア史研究の方法

—Anthony Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce* をてがかりにして—

大木 昌

戦後の東南アジア史研究においての方法論の模索は常に行われてきた。最近の新しい方法論的試みとしてここでは、アンソニー・リード著『交易の時代の東南アジア

動・循環のやはり共通のパターンが強調される。「銀河系政体」「劇場国家」「マンダラ的政治システム」等々、概念モデルは出そろってやや時間も経っているし、考古学上の新しい成果があり、また史料の再解釈も一部進行している。これからなされることは何だろうか。こうしたモデルを肉づけるより実証的な作業なのか、'70-'80年代モデルの批判なのか、それともまた別の道か。新しい方向を提示する用意はないが、議論のために現状の見取図を提示したい。

Loosely Structured Social System ————— 北原 淳

学問的コピーライターよろしく、次々と新概念を出すことを競いあっている感なきとしないアメリカの東南アジア研究の「パラダイム」のなかで、比較的長い生命力をもつのは“Loosely Structured Social System”(1950)であろう。ただし、その概念の理論的検討は1969年のエヴァース編集の“Loosely Structured Social System: Thailand in Comparative Perspective”(68年のAsian Studies学会シンポジウム記録) いらいそれほど進歩していない。報告者の理論的理解も以下のエヴァース編の到達点を一步も出ない。

あきらかにされたことは大略つぎの点であろう。①ルースの示すレベルは地位・役割体系としての固有の社会構造よりもむしろ、文化・パーソナリティーという文化体系のレベルである。②タイ社会の構造は文化体系と社会構造との間に齟齬がある特徴をもつ。③ルースさは方法論的個人主義に適合的な次元(対人関係、小集団等)へ適用するのに向いている。④社会構造と文化体系のどちらに注目するかで全く異なるタイ社会観が生まれる。⑤人類学者はルース概念におおむね賛成であるが、かなりの社会学者は反対である。

しかし問題の第1は、こうした理論的到達点をふまえた概念使用が自覚的になされていないことである。第2は、その結果として一体何がルースであるのか、その理論的レベルが一向にあきらかでないまま、「東南アジア社会はルースである」といった通念が一人歩きしていることである。あるいは第3は、変動期の現在は無用であるとして全く無視されていることである。

報告者自身はルースの次元はある種の基層文化であると考える。したがって変動下にある近代組織においても組織員の動機・態度形成といった点においてはいぜん影響力を残すであろう。論争のありかたは「日本の経営」にとっての日本文化の地位と同様である。

東南アジア史研究の方法

—Anthony Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce* をてがかりにして—

大木 昌

戦後の東南アジア史研究においての方法論の模索は常に行われてきた。最近の新しい方法論的試みとしてここでは、アンソニー・リード著『交易の時代の東南アジア

1450-1680』を検討する。ただし報告者はすでにこれについて詳しく論じているので、本報告では簡単な整理と補足をするにとどめたい。本書が意図した方法論的な問題提起は次の2点に集約できる。

第一点は、従来の部分史の集合ではない東南アジアの全体史を記述することである。このため著者は、フェルナン・ブローデルが地中海世界を中心にヨーロッパ世界をひとつつの「世界システム」としてとらえたように、上記の時代における東南アジアを、活発な交易の時代がもたらしたひとつの「世界システム」としてとらえている。

第二は、東南アジアがひとつの世界であったことを、歴史的に形成された大衆の「物質文化」および生活様式を通じて検証している点である。つまりアナール学派の社会史的アプローチを採用しているのである。これは、従来歴史研究の対象になりえなかった問題をも取り込んで、歴史研究の幅を広げ、その内容を豊かにしている。

上記の2点の他にも、著者が直接意図しているわけではないが、「内側からの歴史」(history from within)や「自律的歴史」(autonomous history), 「変化と連続」(change and continuity)などの従来の方法論的主張に対する、より包括的な解答をも与えていくように思える。これについても検討してみたい。

Culturalismについて——土屋健治

1. Culturalismという用語は、B. Anderson の unpublished paper (1971) で用いられた。しかしそれ以後はむしろわが国で「多用」されてきたらしい。土屋 (1973, 1977, 1982), 大木 (1984) 等。肯定と批判の両面で。
2. Anderson が “culturalism” を提示したのは、H. Feith (1969)への応答を直接のきっかけとしていたが、その背景には1960年代までのアメリカのインドネシア研究のアプローチ (structural-, functional-, comparative-approach) に対する方法論的反省があった。
3. “culturalism”を標榜すると否とにかかわらず、いくつかのすぐれた成果が東南アジア研究者から生まれた (B. Anderson, R. Ileto etc.)。それは東南アジアが“本来的に”備えている多様性と多義性（言語、文化、歴史、植民地宗主国等）ないし両面性（開放系の相と内向系の相）が、東南アジア全域に共通するような“Grand Theory”を作りにくくしていることと関連しているだろう。このことは、近現代史や政治学の領域においてとりわけ指摘できる。例えばラテンアメリカ研究と比較してみると明らかであろう。
4. “culturalism”という確立した方法があるわけではもちろんない。よい作品を作り出せるか否かということである。そしてよい作品は、“culturalism”に寄せられる批判とはまさに逆のこと、つまり、公文書のかなたにかすんでいる世界 (Pasyon や Pemuda や roman picisan etc.) を手もとにたぐり寄せ、その世界のダイナミクスを描き出してきた。それは何よりもラディカル・ナショナリズムを研究対象とし、何故それがラディカルであるのかを叙述してきた。

1450-1680』を検討する。ただし報告者はすでにこれについて詳しく論じているので、本報告では簡単な整理と補足をするにとどめたい。本書が意図した方法論的な問題提起は次の2点に集約できる。

第一点は、従来の部分史の集合ではない東南アジアの全体史を記述することである。このため著者は、フェルナン・ブローデルが地中海世界を中心にヨーロッパ世界をひとつつの「世界システム」としてとらえたように、上記の時代における東南アジアを、活発な交易の時代がもたらしたひとつの「世界システム」としてとらえている。

第二は、東南アジアがひとつの世界であったことを、歴史的に形成された大衆の「物質文化」および生活様式を通じて検証している点である。つまりアナール学派の社会史的アプローチを採用しているのである。これは、従来歴史研究の対象になりえなかった問題をも取り込んで、歴史研究の幅を広げ、その内容を豊かにしている。

上記の2点の他にも、著者が直接意図しているわけではないが、「内側からの歴史」(history from within)や「自律的歴史」(autonomous history), 「変化と連続」(change and continuity)などの従来の方法論的主張に対する、より包括的な解答をも与えていくように思える。これについても検討してみたい。

Culturalismについて——土屋健治

1. Culturalismという用語は、B. Anderson の unpublished paper (1971) で用いられた。しかしそれ以後はむしろわが国で「多用」されてきたらしい。土屋 (1973, 1977, 1982), 大木 (1984) 等。肯定と批判の両面で。
2. Anderson が “culturalism” を提示したのは、H. Feith (1969)への応答を直接のきっかけとしていたが、その背景には1960年代までのアメリカのインドネシア研究のアプローチ (structural-, functional-, comparative-approach) に対する方法論的反省があった。
3. “culturalism”を標榜すると否とにかかわらず、いくつかのすぐれた成果が東南アジア研究者から生まれた (B. Anderson, R. Ileto etc.)。それは東南アジアが“本来的に”備えている多様性と多義性（言語、文化、歴史、植民地宗主国等）ないし両面性（開放系の相と内向系の相）が、東南アジア全域に共通するような“Grand Theory”を作りにくくしていることと関連しているだろう。このことは、近現代史や政治学の領域においてとりわけ指摘できる。例えばラテンアメリカ研究と比較してみると明らかであろう。
4. “culturalism”という確立した方法があるわけではもちろんない。よい作品を作り出せるか否かということである。そしてよい作品は、“culturalism”に寄せられる批判とはまさに逆のこと、つまり、公文書のかなたにかすんでいる世界 (Pasyon や Pemuda や roman picisan etc.) を手もとにたぐり寄せ、その世界のダイナミクスを描き出してきた。それは何よりもラディカル・ナショナリズムを研究対象とし、何故それがラディカルであるのかを叙述してきた。

5. 普遍主義への懷疑的姿勢は、地域研究の一つの拠り所であろう。それは、「ポスト・モダン」と共鳴関係に立ちうるかも知れない。しかしそこに安住すればただのファンションとなる。対象との知的緊張をたえず喚起していくことができるか。普遍主義的課題に応えうるのか。「フロンティア」(開放系の相)と「インボルーション」(内向系の相)との間の往還を持続しうるであろうか。

特別講演

Religion and Anticolonial Movements in Southeast Asian History

Reynaldo C. ILETO

The lecture asks the question: what would a modern Southeast Asian history be like if those religio-political movements that resisted colonialism were given their just due? The problem with current general texts like D.G.E. Hall's and D.J. Steinberg's, is that they are underpinned by the modernist agenda. Thus, the demise of many traditional state systems in the face of the Western advance in the late 19th century is seen as a natural fact of evolutionary development and modernization. The focus henceforth is on urbanization, capitalist economic development, and the rise of nationalist intelligentsias. Since 19th to early-20th century resistance to Western and Bangkok-Thai expansion usually took the form of millennial movements and were led by religious figures, it has been quite easy to marginalise such phenomena in modernist textbooks.

The lecture outlines the ways in which religion figured in the ideology of early anticolonial movements. A distinction is made between official and non-official expressions or readings of religious doctrine. The former generally emanated from state centers and buttressed the socio-political hierarchy; the latter occupied the peripheries and could be subversive of the dominant order. Popular religion should not be seen as illegitimate, a deviation from "truth." Rather, within such religions or ideological systems as Islam, Buddhism, Christianity and the like, the "true" path to fulfillment and the "proper" modes of behavior have been matters of debate and contestation. Much of the internal dynamics of Southeast Asian societies in the past can be traced to such tensions.

Towards the end of the 19th-century anticolonial resistance continued in sites traditionally associated with non-official religions. The leaders were holy men, guru tarekat, hajjis, curers, prophets, royal pretenders—people generally dismissed by colonial sources as "fanatics" and "bandits." The lecture looks into the specific forms of resistance generated by the differing cultural contexts of Burma, Java, Vietnam, Siam and the Philippines. Instead of merely identifying and classifying such movements on an evolutionary scale, as Benda did, attention is

5. 普遍主義への懷疑的姿勢は、地域研究の一つの拠り所であろう。それは、「ポスト・モダン」と共鳴関係に立ちうるかも知れない。しかしそこに安住すればただのファンションとなる。対象との知的緊張をたえず喚起していくことができるか。普遍主義的課題に応えうるのか。「フロンティア」(開放系の相)と「インボルーション」(内向系の相)との間の往還を持続しうるであろうか。

特別講演

Religion and Anticolonial Movements in Southeast Asian History

Reynaldo C. ILETO

The lecture asks the question: what would a modern Southeast Asian history be like if those religio-political movements that resisted colonialism were given their just due? The problem with current general texts like D.G.E. Hall's and D.J. Steinberg's, is that they are underpinned by the modernist agenda. Thus, the demise of many traditional state systems in the face of the Western advance in the late 19th century is seen as a natural fact of evolutionary development and modernization. The focus henceforth is on urbanization, capitalist economic development, and the rise of nationalist intelligentsias. Since 19th to early-20th century resistance to Western and Bangkok-Thai expansion usually took the form of millennial movements and were led by religious figures, it has been quite easy to marginalise such phenomena in modernist textbooks.

The lecture outlines the ways in which religion figured in the ideology of early anticolonial movements. A distinction is made between official and non-official expressions or readings of religious doctrine. The former generally emanated from state centers and buttressed the socio-political hierarchy; the latter occupied the peripheries and could be subversive of the dominant order. Popular religion should not be seen as illegitimate, a deviation from "truth." Rather, within such religions or ideological systems as Islam, Buddhism, Christianity and the like, the "true" path to fulfillment and the "proper" modes of behavior have been matters of debate and contestation. Much of the internal dynamics of Southeast Asian societies in the past can be traced to such tensions.

Towards the end of the 19th-century anticolonial resistance continued in sites traditionally associated with non-official religions. The leaders were holy men, guru tarekat, hajjis, curers, prophets, royal pretenders—people generally dismissed by colonial sources as "fanatics" and "bandits." The lecture looks into the specific forms of resistance generated by the differing cultural contexts of Burma, Java, Vietnam, Siam and the Philippines. Instead of merely identifying and classifying such movements on an evolutionary scale, as Benda did, attention is

paid to the mentalities underlying them, and to their visions of alternative social and political orders. The lecture stresses the importance of putting these “non-official” figures on an equal footing with urban-based nationalist leaders who would dominate the scene from the 1930s. In fact, the success of nationalist agitators from Bonifacio in 1890s to Sukarno in the 1940s can be traced to their familiarity with the “traditional” idioms of revolt.

The lecture suggests that religio-political movements should be understood in their own terms and their currently-muted “story” allowed to challenge the meta-narratives of colonialism and modern state construction. This raises the possibility of a “de-centered” history textbook, one that does not necessarily lead to a so-called modern world-order.

資料・研究短報

タイの寺院文書の所在と種類 吉川利治

タイの3～4月は日中の気温が40度以上にもなる暑季である。今年1992年は記録的な暑さであるとテレビの天気情報の番組が報じていた。タイの友人に会うと、何故こんな暑い時期を選んで調査に来たのかと聞かれたが、大学の授業のない時期、案内をお願いするタイ側助教授の所属する大学が休暇に入った時期、そして、地方の寺院を巡るのには雨季よりも乾季の方が便利となれば、この時期しかなかった。バンコクにいる限り、あちこちでエアコンが利いていて、暑くてもそれほど厳しいとは感じなかったが、地方に出ると暑さはこたえた。熱風吹き渡るなかを田舎のバスに乗り、到着した寺院の庭でどっと吹き出る汗を拭っても拭っても止まらぬままに、うつむいて覗き込んだ途端、ポタリと落ちる汗で貴重な文書を濡らすこともあった。旅は3月下旬から4月の上旬にかけて、タイ国内の各地の寺院に保存されている近代以前の伝統的文書を見て回るのが目的であった。回ったのは南タイのソンクラー、パッタルン、トラン、中部タイのナコーンサワン、カンペーンペット、ピサヌローク、ウタラディット、東北タイのナコーンラーチャシマー、ブリーラム、シーサケートの10県であった。

1. 保存機関としての寺院と県文化センター

a. 寺院の場合

タイ国内各地の寺院に保存されている寺院文書は、各寺院に保存されているが、どの寺院にも保存されているわけではなかった。保存している寺院はむしろ少数派のようであった。経典の類は活字で印刷された洋式の書籍になって広く行き渡り、綴字の違う古ぼけた手写本は使用価値がなく、今は骨董品として残っているだけである。だから、進歩的な住職や僧侶が寺院内の改革や改善をすると、こうした古い経典や文書は無用の長物として、ひとたまりもなく焼却の憂き目に遭っているようである。そ

paid to the mentalities underlying them, and to their visions of alternative social and political orders. The lecture stresses the importance of putting these “non-official” figures on an equal footing with urban-based nationalist leaders who would dominate the scene from the 1930s. In fact, the success of nationalist agitators from Bonifacio in 1890s to Sukarno in the 1940s can be traced to their familiarity with the “traditional” idioms of revolt.

The lecture suggests that religio-political movements should be understood in their own terms and their currently-muted “story” allowed to challenge the meta-narratives of colonialism and modern state construction. This raises the possibility of a “de-centered” history textbook, one that does not necessarily lead to a so-called modern world-order.

資料・研究短報

タイの寺院文書の所在と種類 吉川利治

タイの3～4月は日中の気温が40度以上にもなる暑季である。今年1992年は記録的な暑さであるとテレビの天気情報の番組が報じていた。タイの友人に会うと、何故こんな暑い時期を選んで調査に来たのかと聞かれたが、大学の授業のない時期、案内をお願いするタイ側助教授の所属する大学が休暇に入った時期、そして、地方の寺院を巡るのには雨季よりも乾季の方が便利となれば、この時期しかなかった。バンコクにいる限り、あちこちでエアコンが利いていて、暑くてもそれほど厳しいとは感じなかったが、地方に出ると暑さはこたえた。熱風吹き渡るなかを田舎のバスに乗り、到着した寺院の庭でどっと吹き出る汗を拭っても拭っても止まらぬままに、うつむいて覗き込んだ途端、ポタリと落ちる汗で貴重な文書を濡らすこともあった。旅は3月下旬から4月の上旬にかけて、タイ国内の各地の寺院に保存されている近代以前の伝統的文書を見て回るのが目的であった。回ったのは南タイのソンクラー、パッタルン、トラン、中部タイのナコーンサワン、カンペーンペット、ピサヌローク、ウタラディット、東北タイのナコーンラーチャシマー、ブリーラム、シーサケートの10県であった。

1. 保存機関としての寺院と県文化センター

a. 寺院の場合

タイ国内各地の寺院に保存されている寺院文書は、各寺院に保存されているが、どの寺院にも保存されているわけではなかった。保存している寺院はむしろ少数派のようであった。経典の類は活字で印刷された洋式の書籍になって広く行き渡り、綴字の違う古ぼけた手写本は使用価値がなく、今は骨董品として残っているだけである。だから、進歩的な住職や僧侶が寺院内の改革や改善をすると、こうした古い経典や文書は無用の長物として、ひとたまりもなく焼却の憂き目に遭っているようである。そ

してこうした文書を保存している寺院は、寺院が保存しているというよりも、いささかでも関心のある住職や僧侶が保存し、住職の異動でこうした古文書も動いているようである。保存されている文書はわずか数冊の所もあれば、数百冊の所もある。一般に多くはない。雑然とした経蔵庫に保管されている所もあれば、住職が個人的に所有しているところもある。こうした、むしろ個人的に保管されている文書を閲覧するのには容易ではない。調査を続けているタンマサート大学のP助教授の場合、文部省宗務局の討可を得て、そのお墨付きをもって訪問するが、寺院運営委員会に拒否されたこともあるという。その場合、地方の警察、検察、司法関係の幹部に就いている同窓生に連絡して、いわば地方の権力をを利用して圧力をかけることもしばしばであったという。実際、私を案内してくれた時にも、住職とひとしきり文化財保護の論議をして、ようやく閲覧してもよいという許可を得て、沙弥の案内で経蔵庫に向かったが、その鍵束には経蔵庫の鍵が入っていないことがあった。

b. 「県文化センター」

こうしたタイの古文書を保管している機関として、ほぼ各県にある教育大学(Teachers College)の内に設置されている、各県の「県文化センター」(Sun Watthanatham Changwat)がある。教育大学内の県文化センターは、日本の文化庁に相当する機関「国家文化会議事務局」(Samnakngan Sapha Watthanatham haeng chat)の管轄下にあり、県毎の郷土文化の保存に当たっている。「県文化センター」と呼んでも、教育大学または県内に教育大学が存在しない県では県立高校が、学校の教室を1～2教室使い、出土品を並べたり、古い農具や民芸品を並べたり、郷土芸能の展示場にしていたりする。そしてこれを管理する教官たちが寺院から収集したり、あるいは寺院や旧家から寄贈を受けたりした古文書が保存されている。ここでは一応整理分類され、ガラスの整理棚に納められていたりして、保存状態は寺院よりも良い。また、ごく一部であるが現代文字に翻字されて謄写印刷されているものもある。今回の調査で、最も多く収集し、図書室になって整理分類が行き届いているのは、シーナカリン・ウィロート大学ソンクラー校の南タイ研究所であった。こうしたセンターで収集されている古文書は、その価値を知る担当の教官が積極的に寺院を回り、収集して回った成果であり、その多寡も意欲あるなしによるという印象であった。またここで保存されている古文書は、取捨選択が行われていて、寺院保存のものと比較して、仏教經典類よりもほかの分野が多い。例えば民間療法のテキストや文学や法律などのテキストである。なお、国立図書館の分館が地方にあり、ソンクラーにもワット・マチマーワート寺院内にソンクラー分館が所在するが、分館でも収集されていたものの、すべて中央に持ち去られて、しかも主管の芸術局の有力者の私的なコレクションになっているという話も聞いた。ある寺院を訪問して昨年に見た文書を見せてもらおうとしたところ、そのような文書はないといわれ、残っている文書だけが出てきたことがあった。誰かわけ知りの者がやってきて持ち去ったのだろう、というのが案内してくれたP助教授の説明であった。

2. 寺院文書の種類と内容

a. 文書の形態と文字

文書の形態から分類すると、横に幅広い厚紙コーイ紙の白紙に黒墨と、黒紙に白墨の二通りあり、他に棕櫚の葉を用いた貝葉表がある。中部タイ、南部タイではほとんどがコーイ紙であるが、北部タイ、東北タイでは逆に貝葉表が増える。文字はほとんどがタイ文字であるが、一部に全巻を古代カンボジア文字(Khom)で記録しているもの、タイ文字に古代カンボジア文字をまじえたものなどが見られた。

サムット・コーイ・ダム (Samut Khoi Dam) 中部タイ、南部タイ

サムット・コーイ・カーオ (Samut Khoi Khao) 中部タイ、南部タイ

貝葉表 (Bai Lan) 北部タイ、東北タイ

サムット・コーイは裏表に記入されていて、約20~30枚が蛇腹式に折りたたまれていて。黒紙に白墨のコーイ本は消えやすく読みにくい。幸い白紙に黒墨のコーイ本の方が多い。バイラーンはもう少し多い枚数になっている。また、北タイのバイラーンはほとんどが北タイ文字であるという。

サムット・コーイを使用していた地方と貝葉表を使用していた地方は、明らかに文化が異なるが、中部タイに貝葉表が残されているのは、北部や東北部出身の僧が、その慣習を持ち込んだと推測され、北部タイ、東北タイにサムット・コーイが残っているのは、中央の権力、文化の波及と考えられる。こうした文書はせいぜいラタナコーシン王朝以降に書写されたものであって、200年以上も前のアユタヤ時代に書写されたものとは考えにくい。暑いタイでは紙や棕櫚の葉は虫に食われるか、劣化がはげしいからである。ただし内容は古くからのものを次々と書き伝えていると推測される。

b. 文書の内容

私の関心は寺院文書の内容である。しかし、パラパラとめくって見るだけで、とても逐一読んでみる余裕はない。また、一部はフィルムに収めさせてもらったが、綴字法が現代とは異なり、方言も混じっているようである。文字がかすれて読めなくなっている文書もある。寺院で保存されている文書は仏教経典あるいはそれに類する文書が多いが、おおまかに分類すると、次のようになる。

仏教経典類：アビダルマ、三界経、マーライ経

仏教説話、古典文学 (Wannakhadi) 類

薬事療法 (Tamra Ya)

慣習法 (Kotmai Boran)

古代カンボジア文字で書写されていればたいてい仏教経典である。未来仏の到来を語る『マーライ経』や地獄極楽を語る『三界経』は極彩色の絵入りが多く、あちこちで見られた。タイの仏教の性格を示す経典類である。意外であったのは、仏教経典に比較して薬の製法や民間療法を述べたテキスト (Tamra Ya) が多く保存されていたことである。ある寺院では経典にほぼ匹敵する数の民間療法の文書があった。仏教説話や古典文学は多くないが、かなりある。慣習法は最も少ないが、歴史資料として一番関心がある文書である。僧侶たちは地方に行脚する際、バンコクで中央の法や規律、

文学を学んで書き写し、仏教の教えと共に地方に伝えていたと想像される。そのうえ、薬の作り方や民間療法を学んで地方で伝え、僧侶が地方の人々の病気を治療することにより、地方での尊敬を得て、布教活動を行っていたのだろう。ちょうど19世紀にやって来たキリスト教の宣教師たちが西洋医学の知識を持って訪れ、治療活動をしながら布教活動をしていたのに似ている。近代化以前の僧侶の活動は、仏教の弘布だけでなく、中央の学問知識を伝える重要な役割を果たしていたと想像される。だから、かつての僧侶は還俗すると、民間で「学者」(Bandit)と呼ばれていたのもじゅうぶん理解できる。

慣習法は仏教の僧侶たちがバンコクの『三印法典』を書き写して、巡回するときに地方に伝えたとP助教授は推測する。地方の寺院では、それをまた書き写し、地方で利用されていたのであろう。そのうちに地方の方言が紛れ込み、地方の慣習が書き込まれたと推測している。そして、この慣習法類を含む寺院文書が多く残っている地方ほど、強い地方権力が存在したと推測している。例えば、南タイではナコーンシータンマラート、ソンクラー、パッタラン、東北タイではローイエット、カラシン、マハーサーラカームなどである。

ともあれ、寺院文書の存在は知っていたが、これほどあちこちに、多彩な内容を持って残されているのを見ると、疲れも忘れて興奮を覚えるほどであった。寺院を回って調査するのは外国の研究者にはとても困難なもの、このような寺院文書によって、中央の統治や文化の伝播、地方文化の特徴、中央と地方の関係など、まだまだ楽しみな研究分野が広がっていることを知って、心地よい疲労感と共に帰国することができた。

(1992年5月10日記)

ラオスを訪れて

石井米雄

今年の3月下旬、88年以来4年ぶりにヴィエンチャンを訪問する機会に恵まれた。今回は在ラオス日本大使館の肝いりで、国家開発戦線(Naeo Lao Sang Sat)という国家機関の招待を受けての講演旅行である。公務員、僧侶、学生と研究者を相手に、前後3回の講演会とセミナーを開く過程で、最近のラオスをめぐる状況についていくつもの貴重な経験を積むことができた。

受け入れ機関が文化省であった前回との違いは、「国家開発戦線」というまったく新しい機関が到着から出国まで一切の世話をしてくれた点である。この機関は日本大使館ばかりか米国、ドイツなどほかの国の公館もこれまでほとんど接触がなかったという組織であったが、たまたま私の講演がもっぱら宗教をテーマとしたことが、この組織が受け入れ機関となった理由であることを後で知った。1975年12月にラオス人民民主共和国が成立して15年を経過した1991年8月、ラオスは、全10章80条よりなる新憲法(Latthathamanunhaeng Sathalanalat Pasathipatai Pasason Lao)を制定公布したが、その第7条に、「ラオス労働組合連盟」、「ラオス人民革命党青年部」、「ラオス婦

文学を学んで書き写し、仏教の教えと共に地方に伝えていたと想像される。そのうえ、薬の作り方や民間療法を学んで地方で伝え、僧侶が地方の人々の病気を治療することにより、地方での尊敬を得て、布教活動を行っていたのだろう。ちょうど19世紀にやって来たキリスト教の宣教師たちが西洋医学の知識を持って訪れ、治療活動をしながら布教活動をしていたのに似ている。近代化以前の僧侶の活動は、仏教の弘布だけでなく、中央の学問知識を伝える重要な役割を果たしていたと想像される。だから、かつての僧侶は還俗すると、民間で「学者」(Bandit)と呼ばれていたのもじゅうぶん理解できる。

慣習法は仏教の僧侶たちがバンコクの『三印法典』を書き写して、巡回するときに地方に伝えたとP助教授は推測する。地方の寺院では、それをまた書き写し、地方で利用されていたのであろう。そのうちに地方の方言が紛れ込み、地方の慣習が書き込まれたと推測している。そして、この慣習法類を含む寺院文書が多く残っている地方ほど、強い地方権力が存在したと推測している。例えば、南タイではナコーンシータンマラート、ソンクラー、パッタラン、東北タイではローイエット、カラシン、マハーサーラカームなどである。

ともあれ、寺院文書の存在は知っていたが、これほどあちこちに、多彩な内容を持って残されているのを見ると、疲れも忘れて興奮を覚えるほどであった。寺院を回って調査するのは外国の研究者にはとても困難なもの、このような寺院文書によって、中央の統治や文化の伝播、地方文化の特徴、中央と地方の関係など、まだまだ楽しみな研究分野が広がっていることを知って、心地よい疲労感と共に帰国することができた。

(1992年5月10日記)

ラオスを訪れて

石井米雄

今年の3月下旬、88年以来4年ぶりにヴィエンチャンを訪問する機会に恵まれた。今回は在ラオス日本大使館の肝いりで、国家開発戦線(Naeo Lao Sang Sat)という国家機関の招待を受けての講演旅行である。公務員、僧侶、学生と研究者を相手に、前後3回の講演会とセミナーを開く過程で、最近のラオスをめぐる状況についていくつもの貴重な経験を積むことができた。

受け入れ機関が文化省であった前回との違いは、「国家開発戦線」というまったく新しい機関が到着から出国まで一切の世話をしてくれた点である。この機関は日本大使館ばかりか米国、ドイツなどほかの国の公館もこれまでほとんど接触がなかったという組織であったが、たまたま私の講演がもっぱら宗教をテーマとしたことが、この組織が受け入れ機関となった理由であることを後で知った。1975年12月にラオス人民民主共和国が成立して15年を経過した1991年8月、ラオスは、全10章80条よりなる新憲法(Latthathamanunhaeng Sathalanalat Pasathipatai Pasason Lao)を制定公布したが、その第7条に、「ラオス労働組合連盟」、「ラオス人民革命党青年部」、「ラオス婦

人同盟」などとともに「多民族よりなるあらゆる階層の人民を団結させ動員して、国家を守り建設する責務に参加させると共に、人民の主権者としての権利を拡大し、それぞれの組織における構成員の正当な権利および利益を擁護する組織」として規定されているのが、この「国家開発戦線」なのだと教えられた。

表敬のためその議長を訪問した際、初め同席した高官がいずれも元僧侶であったことが奇異に感じられたが、その疑問はやがて氷解する。議長は大臣経験者と聞き、また党中央でもかなりの実力者であると知ったので、いろいろとぶしつけな質問を直接議長にぶつけてみると、一般の国家行政機構図にのらないこの組織が、実は大統領に直結する予想外に重要な役割を果たしているという事実が判明したのである。とりわけラオス仏教の現状を把握したい私にとって有り難かったのは、かつて文部省宗教局の担っていた「サンガ」と国家との結節点の役割を現在ではこの「国家開発戦線」という組織が担っていると知ったことである。

ここでもらった資料によると、かつてのラオス・サンガは、1989年2月以降、「ラオス仏教中央委員会」(Khanakammakan Sunkang Phutthasasana Samphan Lao)に編成替えされ、かつてのサンガの高僧たちはおおむね「ラオス仏教中央委員会名誉委員」に格上げされ、代わって42名の高僧より成る「ラオス仏教中央委員会」と同じく9名の高僧より成る「中央委員会常任委員会」がサンガ行政の任に当たることとなっている。その新「ラオス・サンガ」の国家統制の直接責任を負うことが知識人の監督などと共にこの「国家開発戦線」の重要な任務のひとつであることを教えてくれたのは、私を最後まで世話をしてくれた同組織の部長さんであった。もと僧侶でありインドで博士号を取得したというこの人の話によると、統一の当初、旧仏教組織にやや警戒的姿勢を崩さなかった新政府も、15年以上の統治経験から仏教のラオス社会における重要性を認識して、これと積極的にかかわっていく方針に転じて今日にいたったのだという。たしかに1989年2月22日、ヴィエンチャンで開催された「第3回全国ラオス・サンガ代表者会議」の議事録を読むと、政府の仏教に対する明確な姿勢の転換を感じられる。それは一方において信仰の自由を認めつつ、社会的威信の高い仏僧については、その高い社会的威信を積極的に国家のために役立てようという姿勢である。この国家方針を明示的に示したのが以下の新憲法第9条の文言である。

「国家は、仏教徒およびその他の宗教の信徒による合法的活動を尊重しこれを擁護するとともに、仏教僧、少年僧、および他宗教の聖職者を、国家ならびに人民にとっての有益な活動のために動員し、その活動を振興する。諸宗教および人民を分断する一切の行為はこれを禁止する。」

仏教僧の行う早朝の托鉢も、88年とくらべ多くなった様である。新政府は、仏教の出家者集団の掌握にかなりの自信を得たのであろう。1975年の新政権成立の前後に政府が仏教サンガに対して示した禁止的、ないし消極的姿勢はすっかり影をひそめ、仏教寺院や仏教美術を国家的文化財としてその保全に乗り出している状況も、寺院博物館などの見学から学ぶことができた。政府高官の宗教行事出席も多くなつたと聞く。こうした状況の今後の展開が興味をひかれるところである。

地区例会・研究会活動状況

関東地区

嶋尾 稔

関東例会は本年より東京大学（本郷）山上会館に場所を移して開催しています。8月、12月、3月を除き年9回開催の予定です。これまで通り毎月最終土曜日に行います（7月は中旬）。下記のとおり、このところ大学院生の力のこもった発表が続いています。今後も若手に発表の場を提供していくと同時に、様々な分野の諸先生方にご報告をお願いして行きたいと思います。

- | | | |
|-------------|-------|-------------------------------------|
| 1991年12月21日 | 舛谷 錠 | 「マレーシア華人文芸の発生と展開」 |
| 1992年2月22日 | 北川香子 | 「19世紀カンボジア・アンドゥオン王の国内ルート再編とその変容」 |
| 4月25日 | 岩城高広 | 「コンバウン時代の財源調書について—ハンタワディー地方の事例を中心に」 |
| 5月30日 | 小笠原健二 | 「政治的イデオロギーとしてのパンチャシラとジャワ民衆の意識」 |

中部地区

伊東利勝

中部地区では、2ヵ月に1回第3土曜日の午後、南山大学を会場にして研究会を開催している。会の名称を東南アジア研究会としているので、東南アジア史学会の会員以外の参加も少なくない。出席者は毎回15名程度であり、今後とも多彩な発表者やテーマをお願いすることにより、会の充実をはかってゆきたい。1991年10月以降の活動状況は以下の通り。

- | | | |
|-------------|----------------|----------------------------|
| 1991年11月16日 | 吉田竹也（南山大学大学院） | 「バリ島の社会・宗教・観光一人類学的研究の諸問題一」 |
| 1992年1月18日 | 荒井茂夫（三重大学人文学部） | 「マレーシア華人政治の現状」 |
| 3月14日 | 森 茂雄（南山大学大学院） | 「ビルマにおける力の諸観念」 |

関西地区

深見純生・黒田景子

1991年10月から1992年3月までの関西例会は摂南大学で開催され、下記のような話題が提供された。参加者は20名から30名である。

- | | |
|-------------|--|
| 1991年10月12日 | 「スンダ的空间秩序の形成—1820年代のプリアンガン地方における支配層のヒエラルキーと景観」 |
| | 大橋厚子（京都橘女子大） |

- 11月9日 「西山の乱期のベトナム」
清水太郎（岡山大学）
- 12月14日 「チャンパ遺跡の現状と修復計画」
重枝 豊（日本大学理工学部）
- 1992年1月18日 「原史時代のメコン流域、シャム湾及びマレー半島」
横倉雅幸（国学院大学）
- 2月8日 「シンガポールにおけるマンダリンとナショナリティ」
根布厚子（シンガポール国立大学東南アジア研究所）
- 3月14日 「サムサムと呼ばれた人々—村落レベルからみたタイ＝マレーの歴史的関係」
黒田景子（大阪外国語大学）



事務局からのお願い

『会報』の内容充実のため、資料・研究短報欄へご寄稿下さい。

新資料に関する情報、探究資料の公開検索、内外での研究集会に関する情報や紹介（但し、本学会の組織とは直接関係なく、かつ恒常に運営されている研究会の年次報告に類するものはご遠慮下さい）、特定分野にかかる内外の新しい研究動向など、二千字程度を目処にお纏め頂き、事務局宛て送付下さい。毎年3月末と9月末に締め切り、それぞれ5月及び11月発行の『会報』に掲載させて頂きます。

住所変更等につきましては、すみやかに事務局宛て一報下さい。

「転居先不明」は会誌『東南アジア—歴史と文化—』『会報』その他各種ご案内の送付に支障をきたすことになります。ご面倒ながら、転居、転勤などの通知先に、本学会事務局も加えて頂きますようお願い申し上げます。なお、今回の変更は、5月25日までに事務局へ連絡のあった分です。

次の方々の住所が不明です。秋野晃司、新井澄美、小西洋一、清水太郎、橋本和樹
ご存じの方は、事務局までお知らせ下さい。

東南アジア史学会会報 第56号

1992年5月 発行

発 行 者 東南アジア史学会（会長 石澤良昭）
住 所 〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学アジア文化研究所気付
電 話 03-3238-3697 FAX 03-3238-3690
郵便振替 東京4-754665 東南アジア史学会
